ヘミングウェイゆかりの地を訪ねて

高野泰志

第2回　ラパロ編

この夏にヨーロッパに行くことを決めたとき，とりあえずラパロにだけは行こうと決めていました。なぜこんなにラパロに行くことに執着していたのか，自分でもよく分からないのですが，私にとって「ヘミングウェイゆかりの地」として一番最初に思いつく土地がこのラパロでした。おそらく初めて読んだヘミングウェイの短編が「雨の中の猫」で，初めて読んだ文学評論が今村会長の『ヘミングウェイと猫と女たち』で，初めて書いたレポート（英語の授業で書いた適当なやつは除く）が「雨の中の猫」についてだったりしたせいで，私の中にラパロという言葉がヘミングウェイと関連づけてインプットされてしまったのでしょう。

「雨の中の猫」は私にとって，もっとも好きなヘミングウェイ作品の一つですが，作品のもとになるスケッチは1923年にラパロで書かれました。当時ラパロに滞在していたエズラ・パウンドに呼ばれ，妊娠1ヶ月の妻ハドレーを連れてやってきたのです。彼らが滞在していたのはホテル・スプレンディードですが，一度このホテルを見ておきたかったのです。

1. アクセス

今回の旅はほとんどなんの下準備もなしに，行き当たりばったりで移動する旅だったのですが（そのせいで後々大変な目に遭います），ラパロに関しては観光ガイドを見てもほとんど何も書かれていません。おそらく日本ではラパロという地名はあまり知られていないのではないでしょうか。

ラパロは地中海沿いのリゾート地で，ヨーロッパの人々にはよく知られた保養地のようです。イタリアの国鉄でジェノヴァから30分くらいのところにあります。ジェノヴァからは海岸沿いを走りますが，地中海の美しい景色をたっぷりと楽しめます。ただ，イタリアの列車に乗るときには少し注意をしておいた方がいいと思います。それは時間通りに発車することがほとんどないということ。何もなくても5分，10分遅れるのは当たり前，という感覚です。そうかと思って安心していると，時々時間ぴったりに出発することがあったりして，全く信用できません。

2. ラパロに到着

ラパロ駅は，下の写真のように白黒にするとわかりにくいのですが，オレンジとピンク色のかわいらしい建物です。

さらに次の写真は駅から見た町の風景ですが，こぢんまりとしていて話に聞くほど高級リゾートという感じはしませんでした。

町がひどく静かな雰囲気に感じられたのですが，それはちょうどお昼時だったからで，どこも昼ご飯を食べる時間はお店を閉めるようです。どうも日本人が珍しいらしく，子供なんかはあからさまに不思議な生き物を見るような目つきで眺め回してきます。ホテルも何も決めていなかったのですが，町の人たちはほとんど英語を話せないようで，やたらと親切にしてくれるのですが，全部イタリア語で何を言っているのかさっぱり分かりません。物珍しさもあったのでしょうが，とにかく助けてくれようとしているのだけはよく分かります。幸い駅員さんは英語を話せる人だったので，駅の人にホテルを探してもらいました。最初は観光案内所ではないのでホテルの斡旋はやっていない，と言われたのですが，言葉も通じないで困っていると，何から何まで面倒を見てくれました。タクシーでいざ，海岸沿いのホテルへ向かいます。

3. 海辺のリゾート

海の近くまで行くと，一気にリゾートらしい雰囲気になります。海岸沿いにカフェやバーがずらりと並んでいます。ただ日本のように海水浴場という感じではなくて，むしろヨットなどのマリンスポーツを楽しむのがメインのようです。そうでない人たちは海辺のカフェでくつろいでいます。

とりあえず観光をする前に，潮風に当たりながらビールでも飲もうとカフェに入りました。スプレンディードはそこの人に聞けば分かるだろうと思ったので，まずはゆったりと海の景色を眺めます。人はたくさんいるものの，日本の海ほどごみごみと混雑した感じではなく，場所は狭いのに（海岸は15分もあれば端から端まで歩けます）落ち着いた雰囲気です。

ビールを飲んでまったりしたところでウェイトレスの人にスプレンディードの場所を聞いてみました。その人は英語が分からないようだったので，奥から別の人を連れて来てくれました。

「スプレンディードを探しているんだけど」

「スプレンディードって，あのホテル・スプレンディード？」

「そう，それ」

「スプレンディードならラパロじゃなくってポルトフィーノだよ」

はい!? なんですって!?

カーロス・ベイカーの伝記を読む限りはホテル・スプレンディードはラパロにあるように思えましたし，パウンドが滞在したのはラパロですよね。それで宿泊したホテルがスプレンディードなのですから，スプレンディードはラパロにあるはず。なんだか混乱してきました。別にもう一軒スプレンディードというホテルがあるのか，あるいは当時の場所から引っ越したのか。

話を聞いてみても，別のスプレンディードがあるわけではなさそうです。とにかく場所を教えてもらいます。ポルトフィーノはラパロからバスが出ていて，およそ40分くらいで着くだろうということ。もしかするとこの辺一体がポルトフィーノまで含めてラパロと呼ばれていて，ここはラパロの中の小区分のラパロなのでしょうか（大阪府の中の大阪市みたいなもの？）

しかし，ホテルへ戻って観光客用のパンフレットをもらい，地図を見てみましたが，やはりポルトフィーノとラパロは別物のようで，むしろラパロを含めた一帯がポルトフィーノ山地区という区分けがされています。ラパロが小さな湾の入り江だとすると，ポルトフィーノは岬の突端の部分にあります。ちなみにラパロへではなく，直接ポルトフィーノに行くにはジェノヴァからの電車をラパロの一つ手前の駅，サンタ・マルゲリータで下車し，そこからバスで向かわなければなりません。つまりまるまる一駅分以上乗り越してしまった状態だったのです。

4. いよいよスプレンディードへ

なんだかよく分かりませんが，気を取り直してもう一度ラパロの駅まで出向いて，そこからバスに乗ることにします。ここで乗るべきバスを探すのにも一苦労だったのですが，全く言葉の通じない現地の人たちにさんざんあちこち引っ張り回されたあげく，やっとなんとかバスに腰を落ち着けることができました。

とりあえずここで強く強調したいこと。バスは海沿いの狭い道を走るのですが（ちょっと怖い），バスからの景色は絶景です。ジェノヴァからの電車の風景もきれいだったのですが，こっちは桁違いにすごいです。写真は……景色に見とれていて撮ってません。すいません。

バスは現地の人たちでごった返していて，とてつもない喧噪です。こっちのバスは日本のほど親切ではありませんから，そもそもバス停に名前が付いていないようなのです。どこで降りていいのやら，だんだん不安になってきます。周りで大騒ぎしている連中に聞くのも何となくはばかられますし。途中で一度にぎやかな場所で大勢の人たちが乗り降りしますが，たぶんここはサンタ・マルゲリータだろうと勝手に決めつけてそのまま乗り続けます。

バスはそれからしばらくして，さびれた貧民街のようなところに止まり，人がみな降り始めます。もっと開けたところだと思っていたのでしばらくじっとしていると，それまで隣で大騒ぎしていた目つきの悪い（失礼）少年がここで降りるのだと親切に教えてくれます。イメージとはずいぶん違う場所に着きました。

さて，スプレンディードを探すのですが，ちょうどバス停の向かい側に交番があったので，お巡りさんに聞いてみます。適当に方角を聞いて，丘の上を目指して細い道を上っていきます。ちょうど小雨が降り始めてきて，「雨の中の猫」の舞台としていい雰囲気が出てきました。

実際はスプレンディードはポルトフィーノの手前のバス停で降りれば近いのですが，まあ，バス停に名前もありませんし，英語も通じませんのでどこで降りていいのか分からないと思います。終点まで行くのが無難でしょう。途中で通行人などに道を教えてもらいながらしばらく歩くと，いよいよスプレンディードの入口らしい門にたどり着きます。門番のおじいさんに，宿泊客ではないのだが中を見ていいかと尋ねると，愛想よく入れてくれました。

さて，門を入ってまたしばらく道を上らなければいけません。おそらく歩いて上ることを想定していないのでしょう。結構な運動になります。そもそもポルトフィーノ自体，電車も通らず，車でしか移動できないという，陸の孤島のような場所ですが，その辺の観光客が行くような場所ではないようです。

いよいよスプレンディードにつきました。おそらくこの辺りで一番高い位置にあるのでしょう。海と丘の下の町並みを睥睨する威圧感たっぷりの建物です。なんか「雨の中の猫」でイメージしてたのと違う……。

入口に近づいていくと，もう全然住む世界の違う超高級ホテルです。その辺にいる宿泊客はあからさまにお金持ちのにおいをぷんぷんさせていて，黒いタキシード（？）の従業員は薄汚い格好の私などまるで眼中にありません。完全無視。なんなんだ，このセレブ感は？

「雨の中の猫」ってちょっとこぢんまりした清潔なホテルに，中流のちょっと上くらいのアメリカ人が泊まっているって雰囲気じゃありません？　少なくとも私はそう思っていました。単に私のような貧乏人とは経済感覚が違うだけ？　それともパウンドやヘミングウェイが利用したせいで有名になって，こんなに立派なホテルになったんでしょうか。

とうていそのままの格好で中に入れる雰囲気ではありません。社会階層って，目で見て分かるもんなんですね。その辺のラフな格好をした宿泊客でも，やはり別の階層の人なのだとすぐに分かります。結局ホテルの中までは見ませんでした。というわけで，期待していた皆さん，すいません。中庭も，そこにある噴水や銅像も撮ってません。

『ヘミングウェイと猫と女たち』によれば，「雨の中の猫」の舞台はスプレンディードですが，登場人物のホテルの主人はコルティナ・ダンペッツォのホテルの主人だそうですが，実は背景となった土地はポルトフィーノ（ラパロ）で，案外ホテル自体もコルティナの方だったのではないでしょうか。というかそう思いたい。

5. 最後に

結局さんざん苦労して分かったことは，スプレンディードがラパロではなくポルトフィーノにあったということ。そんなのは行く前に調べておけという感じですね。実際，ホテルのホームページにちゃんと載ってます。ちなみに1泊シングルでも10万円以上します。

今回は「ヘミングウェイゆかりの地を訪ねて」というよりは不注意な観光客のどたばた珍道中という感じでしたね。次回はストレーザ編です。お楽しみに。